



Title	ポー短篇小説の評価(1)
Author(s)	鈴木, 俊司
Citation	Osaka Literary Review. 1968, 7, p. 105-115
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25829">https://doi.org/10.18910/25829</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ポー短篇小説の評価(1)

鈴木俊司

ひとりの天才を測る尺度として、人は、彼の作品における欠陥あるいは彼の著作の弱点を、それにより彼を低く位置させようがために、用いるべきではなく、むしろ、ひたすら彼の最も卓越せるところだけを用いるべきである。……ショーペンハウエル<sup>①</sup>

### I. 人間ポーとその背景

自己を信じ切って夢中になっている19世紀アメリカ社会の最中において、人間心理の分析者としてのポーの鋭い眼は、人間の本源的性質の内に宿っている暗い一面をどうしようもない実存的事実として捕らえた。ポーは云う、「人間の中には近代哲学が考慮に入れたがらないある神秘的な力がある。しかも、この名付けようのない力なしには、この根源的な性向なしには一連の人間の行為は説明不可能だ。つまり、悪いことであり、危険なことであるというだけで魅力を持っている行為がある。いわば、深淵の魅力とでもいうものだ。この原始的な抗い難い力とは、生得の天邪鬼であり、これに駆り立てられて、人間は絶えず殺人を犯し、自殺を決行し、暗殺者にも死刑執行人にもなるのである。」<sup>②</sup> これは、後に精神分析学の分野でフロイトが例のリビドーの二局面として説明した死の本能及び攻撃の本能<sup>③</sup>に該当する人間心理の看破である。さらにこれは、世界を盲目的意志の表象として捕らえ、人間をこの非合理的にして能動的な力たる意志の客観化の頂点に立つものと主張するショーペンハウエルの哲理と軌を一にしている。

ところで、この様ないわば暗澹たる側面から人間の存在条件をひとたび

垣間見てしまったものにとって、人間文明の文質的進歩など、取るに足りない戯言に過ぎない。それどころか、進歩という概念そのものが、荒唐し切った文明人の自らを慰めるために捏造したまやかしの哲学に過ぎないものに思われる。かくしてポーは同時代のアメリカ人達が無邪気に信じ込んでいる民主主義を激しく揶揄し、更に驚くべき事には、はやばやと社会主義者達の轻信性を攻撃した。だが、単なる科学者でも、単なる哲学者でもなく、何よりもまず、ロマンティックな魂を所有した詩人であったポーは、決して、人間の進歩を否定し、人間精神の悪魔性を謳い上げることに犬儒的な喜びを見い出していたのではない。むしろ彼の芸術は、人間の存在条件の不条理に対する勇敢な詩的な反抗であった。人間の存在を決定的に規定している死を克服しようとする執念を彼の飽くなき美の追求の中に読み取らない読者がいるだろうか。ボードレールは彼の作品の中に「天国を忘れられない墮落天使の熱い溜息」<sup>④</sup>を聞き、アンドルー・ラングはポーの詩を「死の丘の彼方から聞こえて来る豎琴の響き」と断じているが、これらはみな、ポーのギリシヤ的な魂の輪廻の信仰と現実の死を克服しようとする執念とが織り成す印象ということができよう。

さて、ここでボードレールの観察眼<sup>⑤</sup>に従って、19世紀前半のアメリカ社会を見てみよう。それはまず、物質主義に捧げられた18世紀の英雄、会計事務所の道徳を作ったフランクリンの時代の基礎の上に開花した時代であった。確かに、人々はヨーロッパに向けていた眼を、独立を獲得した自負心をもって、国内に転じ、西部へ西部へとフロンティアを拡大し、いかにも無際限の自由を満喫しているかの如くであった。だが半面、名誉を要求した廉で、鎖につながれた黒人が焼殺され、劇場の平士間で暗殺者が活躍したりといったような異常な社会現象はアメリカ社会の非人間的な無秩序を示していた。しかも、この無秩序混乱をものともせぬかのように、聖書の偽善の道徳が横行していたのである。思うに、金になること、物質的利益を齎らすことならば何をやっても良いという例外規定を設けている道

徳ほど真の道德に遠い道德はないのではないか。こういった道德の跋扈している時代にあって、ポーが芸術に道德の介入を許さなかったのは、芸術のための芸術というこの芸術理念からというよりも、むしろ偽善を嫌い真理を愛する彼の性向の当然の結果であつたろう。だからポーの表面的な道德的無関心は19世紀アメリカ社会の産物であつたというも過言ではない。だが、ポーの道德的無関心は決して本質的なものではなく、アレンライトが明らかにした如く、<sup>⑥</sup>むしろポーには、一層深い意味で普遍的な道德的問題に対する強い関心があつたということを注意しなければならない。元来ポーは、あらゆる偉大な宗教家、道德家に共通した資質、即ち、人間の悪業に対する深い洞察力及び犯された悪に対する痛ましい悔恨の情をそなえていた。「ウィリアム・ウィルソン」や「裏切の心臓」や「黒猫」の中にこう云つた資質を読み取らない読者がいるだろうか。今は際に、ポーは、「神様、この憐れな魂をお助け下さい。」とたった一言叫んだ。

## 注

- ① Arthur Schopenhauer, 「パレルガ・ウント・バラリボメナ」石井正訳
- ②, ④, ⑤ Charles Baudelaire, “Notes nouvelles sur Edgar Poe” 1857
- ③ Sigmund Freud, “Das Uebnighagen in der kultur” 1930
- ⑥ Allen Tate, “The Angelic Imagination” 1951

## Ⅰ. ポーの短篇小説論

ポーがコールリッジの亜流であるかどうかはさて置いて、兎も角も彼は優れた芸術作品を産む原動力として、諸能力の女王たる想像力を主張した。ポーにとって最も貴重な想像力の産物は詩であつたことは勿論だが、また彼は多種多様な結果をうむ想像力の芸術領域として、短篇小説のジャンルを開拓完成した。ポーは直接短篇小説の手法について特別の著述を残していないけれど、ホーソンの小説を論じた小論によって、詩に対するのとはほぼ同じ製作態度を短篇小説にも要求していたことが窺われる。即ち、最初に読者にあたえるべき効果を考え、その効果に相應しい事件を案出し

て、更にそれらを最も無駄のない適切な順序に配列することを主張した。この厳密に計算された手法が実際にポーの作品の上にどう反映しているのか、いやそれよりもポーは本当にそういう手法を用いて製作をしたのか、しばしば批評家の間で問題になって来た。エリオットは有名な論文<sup>⑦</sup>の中で、ポーがまこと自分の創作理論を実施したにしては、その詩があまりにも安易に流れ過ぎていることを指摘し、その結果、ボードレールやマラルメやヴァレリーと違って英語を母国語としている英米人にはポーの創作理論を真面目に受け取るわけにはいかなかった事情を述べている。確かに初期のヘンリー・ジェームズ、<sup>⑧</sup> イェーツ、<sup>⑨</sup> アルダス・ハックスレー<sup>⑩</sup> が等しく非難したように、ポーの詩には、何かしら子供じみた俗っぽい要素が混入していることは否めない。ところでポーの短篇小説はどうであろうか。悲しいかな、ここでもまた、時折、ポーの未熟さ、俗悪さが顔を出している。けれども、ここで注意すべきは、ポーの成功した作品は殆どすべて、一見支離滅裂な告白体の文章である場合にも、著者の首尾一貫した意図と細やかな気配りが、作品の細部にまでいき渡っているということである。ジェームズ・ガルガーノはポーの精神の未熟性が云々されるのは究極的には、ポーの作品にあらわれる絶えず絶叫を続けるナレーターとポー自身とを故なく混同することから生じるとし、実はこのナレーターの原始的な心理は心理劇を完全なものにするための仮面に過ぎないことを論証した。<sup>⑪</sup> 従ってガルガーノはポーを自己陶酔的な、センチメンタルな大言壮語に耽けるものとして非難するのはあたらないと力説する。ポーがナレーターと完全に別のもので、<sup>⑫</sup> ポーは主人公が発狂なり、自滅なりしていく過程を極めて冷徹な眼で追っているとするガルガーノのこの説明には全面的に賛成する訳には行かないが、ポーとナレーターとが完全には同一でないこと、及び、ポーの成功した作品にあっては、常にポーの所謂数学的に計算された一糸の乱れもない主知主義的な手法が美事に用いられていることは明らかである。従って、詩においてはいざ知らず、短篇小説にあって

は、ポーの主張した創作理論は、たとえレウィゾーンが「彼自身に不可能なものを芸術の法則とした」<sup>⑧</sup> といってポーを非難したとしても、創作の理論たる重要性を今なお充分に保持しているといえよう。だからこそ、ベイツだって、短篇小説の理論的開祖としてポーとゴードリの二つの名前をためらわず挙げていたのである。<sup>⑨</sup>

## 注

- ⑦ Thomas Stern Eliot, "From Poe to Valéry" 1948
- ⑧ Henry James, "Comments (a review of *hes Fleurs du Mal in the Nation*)" 1876 但し, James の Poe 評価は一生を通じてかなりの動揺があり, 後年 Andrew Lang に宛てた手紙では Poe の短篇を再評価している。
- ⑨ William Butler Yeats, 1899年 W.T.Horton に宛てた手紙に次の評がみえる。"The whole things seems to me insincere and vulgar. Analyse the Pit and the Pendulum and you find an appeal to the nerves by tawdry physical affrightments, at least it seems to me who am yet puzzled at the fame of such things."
- ⑩ Aldous Leonard Huxley, "Vulgarity in Literature" 1930
- ⑪ James W.Gargano, "The Question of Poe's Narrators" 1963
- ⑫ 確かに著者と主人公を全く同一のものと看做しての議論は文学鑑賞のはんの初歩的な誤りをおかすことになるのは自明のことだが, 後に述べるように, ポウ作品の本質が人間心理, とりわけ, 異常心理ないし無意識心理を描写することにあつたとすれば, 自づから, 著者とナレーターとの距離は, 他種の作家に較べて極めて接近して来る。何故なら, 創作者の側から見れば, 知ることのできる理解することのできる無意識なり異常心理は, 畢竟己れのものしかないからである。
- ⑬ Ludwig Lewison, クセジュ文庫「アメリカ文学史」中の引用文
- ⑭ H.E. ベイツ, 開文社「近代短篇小説」中西秀男訳

## Ⅲ. ポー短篇小説の本質

ポーは二・三の散文詩, そして一篇の長篇小説(ゴードン・ピム)を含めて, 七三篇の小説を残した。その中には冒険譚あり, 一種の科学小説あり, 推理小説あり, 怪奇小説あり, おまけに未だに名付けようのない, 強

いていえば象徴小説としかいい様のない小説（例えば、「ウィリアム・ウィルソン」、「群衆の人」、「沈黙」）もあり、誠に近代小説のあらゆるタイプの小説が網羅されている観がある。ポーは一体これらの小説で何を追求していたのであろうか。大方の平均的読者が想像するように、怪奇な美を追求し、常に新鮮な驚きを与える怪奇を求めた結果、かくも夥しい実験を試みたのだらうか。そして、その結果、ポーの作品にはあらゆる怪談の持つ宿命、即ち、読後の空虚感が伴うのは已むを得ないということになる<sup>⑤</sup>のであろうか？ そうではない。確かに単なる怪奇な美を追求しただけの幾つかの作品、例えば、「赤死の仮面」や「アッシャー家の崩壊」もあるが、大抵の小説でポーが追求しているものは、美ではなく、真理である。美は趣味の領域に属し、主として詩が追い求めるものであることをポーが心得ていなかったはずがない。小説は詩より、より知的なものであり、従って、好んで真理を追求する。ボードレールもポーの二・三の純粋な美を追求した短篇よりも、真理を目的として持っている短篇の方が、優れていると述べている。<sup>⑥</sup>

さて、ポーが執拗に追い求めた真理とは、それは人間の真理、即ち人間心理であった。ポーの短篇の内、今日でも読むに値し、そして今後も読み続けられるであろう作品は、多かれ少なかれ、人間心理を、いわば、今日の心理学者の鋭い科学者の観察眼で抉っている。世にいう怪奇小説（例えば、「黒猫」、「天邪鬼」、「裏切の心臓」、「ベレニス」、「モレツラ」、「リジャ」、「ウィリアム・ウィルソン」、「群衆の人」、「アマンチラードの樽」、「ホップ・フロッグ」等）は、人間の異常心理、ないしは無意識世界を扱ったものであって、またそれ故、通常人の中にも必ず潜んでいる異常性故に、これらの作品が極めて奥深いところで我々の胸にせまって来る。例えば「リジャ」を一読して、主人公の二度目の妻がその臨終の床で主人公の先妻の妻に変わるという信じ難い話がいとも巧みに語られているに過ぎないと思う読者も、「ベレニス」「モレラ」と読んでみれば、これら三篇の間に

存在する不思議なテーマと状況の繰返し（即ち、主人公の愛する女性に対する両極的態度、愛と恐怖、さらにその間に介在する死）を発見し、それに何故か胸をうたれる。これこそ、マリー・ボナパルトが鮮かに解き明かしたように、<sup>⑩</sup> ポーの幼児期の母親に対するリビドーの転移現象であることは間違いあるまい。つまり、ポーは深い自己省察によって自己の無意識界の願望ないし強迫衝動をこの三作に美事に形象化しているのである。

他方、世にいう探偵小説（例えば「盗まれた手紙」、「モルグ街の殺人事件」等）は、いわば19世紀までのフランス心理小説（例えば、クレープの奥方、マリアンヌの一生、危険な関係、アドルフ、アルマンス等）が則った次元での、いいかえれば意識心理学（或は通常心理学）の次元での人間心理を扱っているといつてよい。即ちここで問題になっているのは概ね思考の硬直と柔軟性である。

第三番目に、この二つの異常と通常の人間心理の中間に位する人間心理を発いた作品がある。その最適の例は、描写の緻密さに芥川が驚嘆した<sup>⑪</sup> 「スフィンクス」であろう。ここでは後に示すように、人間の注意の病態が甚だ科学的に処理されている。

第四番目に、限界状況における人間心理という、実験心理学的なテーマを持った作品が目につく。これに属する最上の例はイエーツがその真価を理解できなかった<sup>⑫</sup> 「筭と振子」、更に「瓶の中の原稿」や「メールストロームへの墜落」等の優れた冒険譚がある。人間の限界状況とは、とりもなおさず、死のことであるが、「白痴」や「悪霊の」中で差迫まる死の観念に突き上げられた人間の示す心理的反応を細かく描写したドストエフスキーは、逸速く、ポーの特色を次のように述べている。「ポーは概して途轍もない現実を選び、主人公達を極めて異常な外部的ないし心理的状況のもとに置き、その人物の心の様子をこの上ない炯眼と驚くべき迫真性をもって描写する。更に彼にはもうひとつの特徴、彼にのみ個有で、彼を他のすべての作家とは異ならせている生々しい想像力がある。彼の幻想が他のす



すべての詩人達のそれを凌いでいるからではなく、この想像力から、彼の細部を生き生きと描写する他の作家には見られない力が生まれる」と。<sup>②</sup>

以上の心理学的な分類をもう一度念のため纏めておくと次のようになる。「第一群～異常心理学・無意識心理学～怪奇小説」,「第二群～通常心理学・意識心理学～推理小説」,「第三群～中間的なもの(注意の病態)～怪奇小説」,「第四群～実験心理学(限界状況における人間心理)～冒険譚」云うまでもなく、私はポーの短篇がすべてこの四つの範疇に入ると主張しているのではなく、ポーの優れた作品が大体人間心理を扱っており、その心理の掴まえ方に、ほぼ上の四つの局面が考えられるというのである。<sup>③</sup> 思うに、短篇作家としての真のポーは、決して夢幻の世界をさ迷う詩人ではなく、想像力と知的分析力をもって、真の人間性、即ち、人間心理の発掘につとめた最初の近代作家、いや、現代作家であったのだ。

次に「スフィンクス」を例にとって、ポーの瞠目すべき心理分析の辣腕をみてみよう。まずその梗概を記す。

「ニュー・ヨークでコレラが跳梁を極めていた時、私はある親戚の男の招きで、ニュー・ヨーク近隣の別荘に行った。毎朝毎朝ニュー・ヨークからもたらされる知人の死の知らせに私達は怯えていた。特に私は南方からもたらされる死の雰囲気以外何も考えることが出来なかった。哲学上の信念によって、私より幾分落着いていた私の親戚は私を元気付けようとしたが、私は彼の書斎にある本を秘かに読んで、いよいよ迷信的な気分浸って行った。私達は「前兆」のことを論じ合った。彼はそれを否定したが私は肯定的な考えを持っていた。というのは、私は別荘に到着して間もなく、何かの「前兆」としか考えようのない怪物を見かけたからだ。(ここで、いかに疑いようのない様子でその怪物が現れたか、そしてその怪物がどんなものであったかの細かい描写がある。) 私はそのことを直ぐに彼に知らせようとしたが、どういう理由か自分にも分らない嫌悪を感じてそれ

を思いとどまった。が到頭、例の怪物を見たのと同じ時刻に同じ部屋で彼と座っていた時、私は彼に私の見た怪物のことを打明けた。彼は信じない。そうしている内に、私は窓を通して、この前と同じ怪物が丘の上に登って行くのを見た。私は彼の注意を促したが、彼は、見えないという。私は自分にだけ見えるこの怪物が私の「死の予兆」か、「狂気の予兆」かのどちらかであると思って絶望する。その時彼は私にその怪物の詳細を厳しく問い始めた。私の答を聞き終ると、彼はほっとしたような様子で、人間の理解力につきまとう距離と大きさの誤認についてのべ、書齋から一冊の動物学事典を取り出して来て、その中のスフィンクス「スズメガ」に関する説明を読み始める。私の見た怪物は実はスズメガの拡大されたものであったのだった。その親戚の男は、実際、窓ガラスの棧にかかっている蜘蛛の糸をゆっくりとよじ登って行くスフィンクスを見い出した。」

ついでながら、本作品ほどポーの創作理論が確実に遂行されている例は数少ない。謎を生む雰囲気の設定→謎の進行→クライマックス→謎の解決といった順序で、淀みなく、一分の狂いもなく筆が進められている。典型的な短篇小説の構造をそなえているといえよう。

さて、対象の過大認知は聴覚において最も一般的であり、誰しもが多かれ少なかれ経験することだが、視覚のかかる過大認知はもはや「注意（あるいは知覚）の病態」と名付けてよいものであろう。ポーはこのような病態の発生する過程を実に美事に、「注意」や「意識」や「知覚」を取り扱う現代心理学の観点からみても殆ど非の打ち所がないほど、実に正確に、しかも大そう芸術的な雰囲気の中に擱まえることに成功している。このような「知覚の病態」をポー自身経験したことがあるのか、それとも本作品は純粋な思索の結果に過ぎないのかはさておき、少なくともポーは、このような「知覚の病態」の原因を鋭く分析していたことは明白である。というのは、本作品を分析して得られる「知覚の病態」の条件が科学的にも極

めて正確であるから、その条件をケ条書すると次のようになる。

1. 情緒的に極度の恐れ（戦き）の状態にあること：ここでは明確な「死」に対する恐れ。

2. 恐れの結果、不合理な実体の存在を感情的に信ずるに到っていること：ここでは「死の予兆」の存在に対する信。

3. 無からこの病態が発生するのではなく、外的誘因（インセンティブ）が存在すること（この点で単なる「知覚の病態」は完全な幻覚と区別される。）：ここではスズメガの存在。なお、この主人公は明らかにスズメガに関する記述を読んでいて、けれども彼の意識はそのことを奇妙にも忘却していたのである。

4. 意識自我が忘却していることを無意識自我は知ったいる。：ここではそれは次の文によって明らか。

Upon recovering, my first impulse of course to inform my friend of what I had seen and heard — and I can scarcely explain what feeling of repugnance it was, which, in the end, operated to prevent me.

この嫌悪（repugnance）は、無意識自我が自己の「知覚の病態」の原因を知っていること、いいかえれば、意識には昇ってこない所で、この病態の原因を彼が知っていたことに由来するのである。

以上のような、科学的にも正確な人間心理の把握に基付いて構築されている点に、本作品の永遠不滅な面白さがあると私は信じている。

本作品はほんの一例に過ぎない。意識、無意識を問わず、ポーの人間心理の明察はまこと天才の名に値する。ポー短篇小説の不死の生命は、さきにも述べたように、単なる怪奇な美に存するのではなく、この人間心理という変る事のない真理にこそあるのである。

## 注

⑮ 吉田健一、筑摩書房「世界文学大系33.）

- ⑯ Charles Baudelaire, "Notes nouvelles sur Edgar Poe" 1857 "Or, les artifices du rythme sont un obstacle insurmontable à ce développement minutieux de pensées et d'expressions qui a pour objet la vérité. Car la vérité peut être souvent le but de la nouvelle, ... Et c'est aussi ce qui fait que l'auteur qui poursuit dans une nouvelle un simple de beauté, ne travaille qu'à son grand désavantage..."
- ⑰ Marie Bonaparte, "The Life and Works of Edgar Allan Poe: a Psycho-analytic Interpretation" 1933
- ⑱ 芥川竜之介, 「侏儒の言葉・ポオ」 1924
- ⑲ 注 9 参照
- ⑳ Fyodor M. Dostoevski, "Three Tales of Edgar Poe from Wremia, 1861, translated by Vladimir Astrov"
- ㉑ 実際ポーの短篇の中には "Diddling" や "The Business Man" のような、ここでいうポー短篇小説の本質とはほど遠い傑作があることを忘れてはならない。私はポーの全短篇をあたかも一つの作品として眺めれば、また新たなポー解釈が生まれて来るような気持を抱いているが、その議論は他日にゆずろう。